佐藤次高先生を悼む

文学学術院教授佐藤次高先生は、昭和二年四月一日に逝去された。体調を損なわれていることはかねて察していたが、突然の訃報に接しようと、まことに思いがけないことであった。昭和四年四月に東京大学から本学に移され以来、わずかに八年、早稲田にイスラーム研究がようやく根付かせたところでのご逝去は、あまりにも早いというしかなかった。

佐藤先生の研究室でのご業績、東洋文庫研究部長や、「イスラーム地域研究」研究代表としてのご活躍などについて、ここに長々と述べるまでもないであろう。すでに『東方学』（第三三号）や『史論』（第二三巻）などに、先生をよく知る方々による追悼文が載せられているので、そちらに譲りたい。

私は、佐藤先生が本学に赴任されてから、大学の仕事の上でいささかお付き合いをしたに過ぎず、先生のご研究や人柄について、ここに詳述することはできない。ただ、八年前を通じての印象をひとつ挙げるとすれば、学生指導はもとより、ちょっとした雑務に至るまで、先生が常に懸命に対応されていったということである。

佐藤先生は、文学部東洋文学専攻では、年度はじめの四月から五月に、進級したばかりの二年生が川奈セミナーハウスで合宿を行ったのが恒例となっていて、佐藤先生も、特別の用事がない限りは必ず参加され、学生を前に「聖書のプラーネヒーム」という名の魚や、執筆中の砂糖に関する著書などについて、楽しげに語っておられた。昭和七年に文化構想学部が設立されると、佐藤先生は文化学部に所属されるが、多くの学生が先生の高名を慕って演習やゼミに参加した。本誌と同じ頃に

柳澤 明